



霞ヶ浦の帆曳船は、私達湖の周辺に住む人間にとって、忘れることのできない風物詩でした。数百艘の白帆が風をはらみ夕陽を浴びて碧色の湖面を滑り行く様は、正に何とも形容し難く美しいものでした。しかし、昭和四十二年を境として、帆曳船はトロール船に代り、今は僅かに観光用として名残りを止めているに過ぎません。ちょうど帆曳船が湖面から姿を消した頃から霞ヶ浦の汚染が急速に進み、漁獲量も年毎に激減している事実を考へ併せると、帆曳船からトロール船への移行は、ただ単に漁獲方法の变化を意味しているのではなく、自然と人間が調和しつつ生きていた時代の終焉を告げているような気がします。そこで今回のインタビューは、帆曳船の発祥の地、出島村を訪ねてみました。

帆曳船の話

折本 幹 (出島村の宮)

佐賀善治 (出島村牛渡)

折本 帆曳船という漁法を發明したのは、私の四代前の折本良平という先祖でしてね、今から九十年程前のことです。明治の中期的なことですね。まあこの頃までは